鐘銘考

は し が き

加藤諄、 に 料等に関して武田英昭師、 下を誌すことにしたい。尚、 て印刷にふすることになつている。従つてここには第二区以 することになつた。第一区の訓読並びに校異は既に出来上つ での解読を試み、第一区を加藤先生、第二区以下を私が担当 にもたらすことが出来た。 のと発願して十有五年の歳月が経過した。 なつたので深謝のほかはない。 西本願寺飛雲閣の東北にある古鐘の銘文を読んでみた 金沢邦夫、両先生の協力により、 そこで鐘銘の第一区より第四区ま 竜大図書館の大原義行氏のお世話 この採拓並びに本願寺にある資 今日、 鐘銘の拓本を机上 はからずも いも

梵文の解読

をロー 先づ鐘銘の第二区、十八行の悉曇文字で書かれ ナイズしてみよう。 こゝに悉曇文字をも併記するの ている六呪

> ⊻. Sa

西

本願寺御殿梵文鐘銘考

分

島

が妥当であるが紙数の都合で省略した。

小

島

通

正

9		8		7	6	5		4		3		2		1 行 目
"		"		"	"	"		"		"		"		Ħ
sa	dha	ya	٧ā	na	Ė.	Ħ.	hūm	₽.	ku	na	'n	ä.	ma	ά
dhā	ne	ta	ja	maḥ	ga	pa	·D	nāṃ		mo		pa		æ
ne		thā			a	Ξ.		ф		а		dma		mo
sa		ga		sa	Ξ.	рa				șta				00
				rva	te	te		jña		a sī		jva		gha
rva		ta		du	⊻.	ku		na		Ξ,		la		vai
mā		ya			mi.	hā		ı va		nāṃ		pra		ro
		ta		rga		ku								
vi		dya		₽.	r.	ı hā		bha		sa		va		ca
so				рa	te	ā te		se		mya		rtta		na
dha		thā		μ.	svā	e tra								ma
					hā			dhi		ksaṃ		ya		
ne		thā		so		ņi		r.		₽		hi		hā
su		ф		dha	da	te				bu		hūm		bu
ddhe	14 字	ı so	14 字	a na	12 字	13 字	13 字	dhi ri	13 字	ddhā	12 字	pha	13 字	dra

西本願寺御殿梵文鐘銘考(小 島)

1行目 na mo bhā ga va te trai lo kya pra ti vi 15 »	羅尼である。即ち 24 %次に第三区、十八行と第四区、十三行目までは仏頂尊勝陀 25 8 8 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9 9	羅尼である。 2 ぱて十三行目より十八行目までが大宝広博楼閣善住秘密根本陀 2 ぱて十三行目より十八行目までが大宝広博楼閣善住秘密根本陀	滅悪趣菩薩真言、十一、十二行目は一切如来随求真言、そし 1行目破地獄真言、五、六行目は滅罪真言、七、八、九、十行目は	以上の中、一、二行目は光明真言、三、四行目は智炬如来 十八行目	ラニであり、	18 " gu hya dhi śṭi ta ga rbhe svā hā da 10字 次に答	17 ″ la jva la □ vaṃ bu ddha vi lo ki te 11字	11字 これ	🔭 ma le sā ga ra gam bhī re hūm hūm jva 🔿 🕏	15 / da rśa ne ma ṇi ma ṇi su pra bhe vi 口字 8 /	14 " la ga rbhe ma ṇi pra bhe ta thā tā ni 11字 7 "	pu 12字	🖰 🛚 na maḥ sa rva ta thā ga tā nām oṃ vi 🌣 6 🗷	hā 13字 5 "	13 × ya vi śu dha ti hūṃ hūṃ ro ro ca le svā	· i 'ndri 13字 4 //	11 ≈ oṃ bha ra bha ra saṁ bha ra saṁ bha ra ∽ ≈	ddhe svā hā 14字 2行目	乌行目 su ddhe sa rva ka rma va ra nā vi su	
" rya pra bha rā ja 以下不明 te 13字	na mo bha ga va te 以下不明	bu ddhi śu ddhe ja ya ja ya vi ja ya 22	囯 tā bhā ta ko ţi pa ri śu ddhe vi spho ta 악사	目は弥勒真言である。即ち	あり、十四行目より十七行目までは薬師真言であり、	次に第四区、十八行は前述のように十三行目までは尊勝ダ		以下は紙数の都合で省略する。	» śo dha śo dha ya ga ga na vi śu ddhe 2字	" ā ha ra ā ha 以下不明 12字	" a mṛi ta bhi se kei ma hā 以下不明 12字	12 字	sim ca to mam su ga ta va ra va ca na	" ti ga ha na 以下不明 (phi)12字	12 字	sa ma sa ma nta va bhā sa spha ra na ga	" thā oṃ vi ṣu dha 以下不明 (sa)(ma) 12字	囯 și șta ya bu ddha ya bhā ga va te ta dya 2字	12字	

17 16 sam bhai mya ksaṁ bhai 'n șe. 以下不 朗 朗

άio (mai) (t)r(e)ya а (svā) (hā)

18

先づ第二区、

十八行の六咒に関

しては、

既に

嘉永

Ŧ.

年

·五月

梵文の

校

異

に京都、 上人 に不明 十八行 までの るもの 釈」一巻を著わしておられる。 た みてこれ を繙くことにしよう。 おられ 、の命により六咒の解説と校異とをものされ 4な、 目 尊勝 な箇所が多く校異は困 は無いように思える。 因みに阿満師は第三区、 5 伏見の西養寺 V の弥勒真言については、 `ダラニは原文に忠実に鋳刻され ダラニ、 さて 続いて十四― 梵 紙 住 文 数の都合上、 鐘 西本願 銘 [難である。 次に第三区と第四区、 従つて私にはこれ以 略 第四区に関しては何 釈 鋳造の 寺 十七行目 勧学、 の 第二、 六咒 未完成のた し Iまでの 阿満得 ているように思 かし字数 (四頁—二十頁) 「梵 薬 聞 兀 士三 文鐘 師 上附 |は省略 ď, を辿つて めか文字 師 触れ 真言、 が 行 加 鉊 広

目 寸 略 加

第 光明

άio oṃ或ハoiニ Вď 作 gha Jva 仰 月 vai la 形 pra ro ハ 摩多 caВА = na rtta 一非ス ma 、荘厳点 ya hā hūṃ ナリ pd 本トomハ pha dra Ė ma

西

本

願

御殿梵文鐘銘考

分

島

仏菩提 報身 本不 Ľ 生 (樹下ニ 徳ヲ顕 maノ義仏 坐シ ノノ法 Ź maテ 字我 此 ナリ三 徳 ノ 々所不 三帰 oṃ 字ヲ鼻端 身 ス ノ 義帰 可 u 得 字福徳荘厳 命 ,義応身 義供 観 シ テ ノ徳ヲ ノ義万徳 成 道 顕 シ 荘 玉 ス IJ 故 フ a 是

7 12 13

字

世界 宝珠 自身ノ ヲ タチナリ自己ノ心想 V 成 密 教 ス一切皆如是供養トハ即福 光明 種子ナリ 頂上ヲ - 伝フル ラ憶 낈 シテ礼拝 トコ 念シ oṃ 字ヲ鼻端ニ テ 口 趣クト 供 シ供養ス是レ ナリ又帰 ハスレ ハ コ 命卜 観 άio 口 徳ノ義ナリ如是ニ ス ス 字 帰 ナ ν ハ 命ノ ハチ ハ如 \dot{w} 徳ニヨリテ燈明 供 、義ナリ 字ハ 意珠 養 頂 ノ義ナリ ŀ 数多 文 種子 自心 qio 一十方 字 供 ナ 力 ij ヲ

具ス ma ro陀 ナ リhūmハ恐怖ノ義 、義アリa hūṃハ生死即涅槃煩悩即菩 破 IJ ナリjva laハ光明ノ義不空成就ナリ ca Ė. 壊 ル а naく遍照 ハ随意ノ義如意珠ヲイフ宝生ナリpa dmaハ 所謂 ノ義 mo gha 総持一文理含衆徳是ナリ 切 え義 vai 《魔障ヲ破壊ス或ハ伝ニ oṃ $_{\rm ro}$ 切ノ魔障ヲ叱呵シテ滅没 ma hā bu(mu) draハ大印ノ義阿閦ナリ cana ma hā a mo gha ハ不空ノ義 mu 提即仏 pra va rtta dra 🔇 アノ義 セシム又大勤 切真言 不 蓮 空毘 ナリ ya 華 盧遮 ノ本 pha tu 転 va. 那 盘: 勇 ナ 弥

2 ゎ

ノ福 ナ 菙 大印ナリ 莭 IJ pra 徳聚門即下の大悲大智所 切 Va 如来 rttaハ易ナリ転 :⊒: ノ大悲ナリ pa dma jva jva ナ 生 ij la a 謂 ノ ハ 功徳ナリ 是 ク 前 V pí />摩尼珠即 光明 ジ諸 即 рa 功 dma 切 此 如 来 切如 真言 是 大智 $\bar{\nu}$ 蓮

1 / ma

来

授アリトイヘト 因 功力 恒沙功德皆此 木 IJ 満シ罪障ヲ転滅シテ福徳ヲ転得スルナリyaハ第四 ス是故ニ [トス即 土砂ヲ咒スル 力故 一ク此 リア 衆生纔ニ名字ヲ聞クニ即チ如来ノ加持ヲ得ル乃至草 三三不 ノ毘盧舎那如来 切 如 ヨリ生スル故能 善 モ之ヲ略 来 = 就 即チ仏徳ヲ印現スルhūmハ因 根淤泥中ニ於テ即チ如来無量 菩提心ナリ亦是 ヤスシ又上ノ功徳ヲ転シテ即チ我 ノ大智大悲不空大印ノ為メニ 生ノ義ナリ此ノ外密教 切如来不共 一ノ功徳 ノ義菩提心ヲ 真 転所為声ナ 如 ノ深秘口 ジョ印現 町 り身ニ ノ妙体 ė ラ 充

第五 切 如来随求

ndri άio bha ra bha dha \sin hūm bha hūm ra sam ro bha ca ra le

転 ١ 増上ノ義ヲ顕 di ノ字界ヲ助ルトキハ i ndri yaṁトナル此 盛光顕ノ義 i di 極禁ヲ顕ス諸ノ悪障ヲ禁断ス i ndri yaトハ ノ大悲心ノ堅牢誠実ナルヲイフ :ノ根ニアラス謂ク如来ノ大慈心堅牢誠実ニシテ諸 イフ又草木 omハ上ノ如シ bha ra ハ牢実ノ義重称ハ ル此ヲ根 ス此 · ノ 根 1 ハ最勝自在ノ義 i ndaṁ ti ノ字縁ヲ以テ i ハ梵文 ス眼等ノ五根ハ発識取境 ノ i ndri yaṃ ハ大勢用アリテ極 mu laナリ堅住不転 saṃ bha ra 極牢実ヲ顕 ノ勝用アリ i ndyam = ハ禁ナリ ノ義今 一訳シテ ハ堅住不 テ ノ悪障ヲ 朔顕 故二 根トス 重称 _tiハ熾 ス如来 根 ナ

> 禁断 ノ義煩悩所知断尽ス是故ニ遍清浄ナリ hūṃ ハ上ノ如シro ro 離塵 プスル 其 ca ノ勝用 増 動 上ナ ノ義 svā hāハ上 ル コト · ヲ 顕 ス 一ノ如シ vi śu ₽. 遍清

ddha ga rśa ga ra ne maḥ rbha ga ma 5 sa mbhi ü <u>k</u>. marva mate re ₽. ta ė. pra hūm thã hya ns bhe hūm ga pra ⊴. ta tä śdi Jνa bhe thā ta la ⊴. ga άio Jva ma thā nq пď

la

第六

大宝広博楼閣善住秘密根本陀羅

บ bu บ ⊒. 甚深ノ義 hūṃ hūṃハ上ノ如シ jva laハ放光重称ハ大放光 光ナリ vi ma laハ無垢ノ義 sa ga raハ海ナリ 垢妙光ヲ顕スsu pra bheハsuハ善ノ義妙ノ義 広大ナルコト虚空ノ如シト ふvi pu la モアリ ma ṇi pu rbhaハ如意宝光ナリ ta thā ga ātハ如 na maḥ ddhaハ覚ト翻 ta sa rva ta thā 加持 ハ広博ノ義又大円満ノ義アリ ga rbhaハ虚 neハ幢ナリke tuモ幢ナリma ní ma ní重称 ナリ ス ga rbhaハ如虚空ナリ svā hāハ上 ⊴. 82 o 顕ス ga rbhaハ亦蔵ノ義胞 抷. tā nāṃ teハ 覾 ハ上ノ如シoṃ亦上 ナ ⇒ gu hya ⟨ su ga pra mbhi 秘 一ノ如シ ra 〜 **六妙** ナリ ク如 義 IJ ナ

校異

二字通途ニナシ恐クハ衍歟摺ノ銘文ニ対映シテミルベシ śa neニ作ル或ハra śa含シテrśaニ作 su ddhe | ニ|su ddhe | ニ|śu ddhe ニ|作ル宝楼閣陀羅尼ノ中後 so字通途総テ通途ニハśuニ作ル ta 言ノvi mi riノmi云 下 光明真言ノbu draノbu 通途 ノta thā thāノthā字ノ下ga字ヲ脱 通途bha ga va te ハmaニ作ルiノ摩 ノ四字アリ nm ŝ = ス 口. 作 dya thā thāノthā一字衎ス Ħ ルモアリbu ddhaノ上ノ ル 或ハ 多ナシ滅悪越 破地 da sa ne通途ni s. 獄 ti二作 真言ノna 真 ル 滅罪真 言 da ra moノ ラ中

御室法親王とは

が 堰 「郷広隆寺来由 大日 める。即ち鐘楼一宇。高三丈。 本仏教全 起 を見ると広隆 寺誌、二四 .四頁の「山城州葛野郡楓野大 銅鐘 一口 の少納言入道信西為、銘 寺、 建造物の中、 次の文章

即乗りの名をなった。今仏閣僧院、 今仏閣僧院、鐘楼、経蔵、悉尋,,基趾,新加,,修復,故鎔,洪鐘,隔,,樂巴之術,雖,悲, 霊寺之為,,灰,唯感,験仏之免, 烟、方隔,,樂巴之術,雖,彰, 霊寺之為,,灰,唯感,,殿仏之免, 烟、方復説,於,是久安六年正月十九日仁祠忽逢,,回禄之祇,住侶空, 绝,此地之繁昌被,今、霊験奇異言語道断事在,前紀,不,須,爰始,此地之繁昌被,今、霊験奇異言語道断事在,前紀,不,須, 夫広隆寺者、上宮太子濫1触之1秦川勝草11創之1本朝之仏法

雄竜学」首, 鯨魚発ュ声 従_ン風タ報 朱火吐」焰 ・

本顔寺御殿梵文鐘銘考

島

不」待二三下 | 利二益四生間 | 有頂上 | 達二無間城 | 東 - 宣 哉法 菩提暁至 哉法器 妄想眠驚 乾椎標レ名サ

寺第五代の となつて世界の隅々までも響き渡ることを念願し 考えられ 万元年は覚性が亡くなる五年前、即ち三十六歳の時の筆跡と 去が嘉応元年十二月二十七日(1169)となつている。すると永 承記』によると覚性の生誕は大治四年七月二十日(1129)で 万元年になされたと考えられるものである。 法廷が設けられたことが誌されている。これはこの鋳造 て二条院御字、 叙上割注 『広隆寺由来記』に広隆寺が久安六年炎上の後、 るが に御室法親王とあるの 門跡、 2如何。 永万元年(1165)六月十三日に当寺造営供 紫金台寺御室、 ともあれこれら梵字の一字一字が光 は誰であろうか。答え 覚性であろう。 他方、『御 その た 十六年を 理 は仁 透波 室 が 養 由 永 相

1 字 っであ 集成」 宝楼閣陀羅 五 八頁一 尼 の中 五九頁に 後、 十六行目の字数を坪井良平「日本古 は十二字と数えて いるが ح れ は 鐘

し . ら字数 「梵文鐘銘略 てある が、 を 揃える 鐘 釈 面 た K の一頁、 はと め K の 四 一文字を 四文字は見えな 十頁に bha 省略 し た V b ٧a の te 思うに十三 で あろう。 の 匹 ,を挿 入

2

W

(竜谷大学教授)